

令和3年度 第2回総合教育会議

日時：令和3年11月18日（木）

於：西宮市役所本庁舎8階

特別会議室

開会 午後1時30分

○事務局　それでは、ただいまから、令和3年度第2回の総合教育会議を開催いたします。

初めに、市長から御挨拶を申し上げます。

○石井市長　はい、皆さんお疲れさまです。令和3年度第2回西宮市総合教育会議を今日、開催をさせていただきます。

その冒頭に当たりまして、新型コロナの対応で、教育現場のほうでは大変気を遣っていただき、そして、御尽力いただき、こうした御協力もあり、今日、市全体ではありますが、感染が大変落ち着いているという状況でございます。

一方では、第6波が来ないとも限りませんので、引き続き、そうした面に十分御注意をいただきながら、そして、市全体で感染のない、第6波が来ないように、仮に来たとしても、そうしたシリアスな状況にならないように、一方で子供の健全な育成のために必要な教育活動をしっかりと取り戻していくというようなことで、引き続きお願いしたいと思います。

また先般、教育大綱を改定したのに当たりまして、チラシが出来上がり、全ての子供に配っていただく、そして私自身も民生児童委員の理事会、それから、社会福祉協議会の理事会などでも説明の機会をいただき、社会全体で子供を育てていくと、そして、子供だけでなく、大人も生涯にわたってしっかりと学び、知・徳・体バランスの取れた全人教育を西宮全員体で目指していこうというようなことを、今、広めつつあるところであります。

コミュニティスクールなど、積極的に教育委員会を含めてやっていただいていると

ころであります。地域とともに子供たちが育み、そして大人も成長していくという
ようなことをそうした面でも進めていければと思いますので、引き続きよろしく願
いいたします。

今日は、「G I G Aスクール構想」に基づく西宮の教育情報の現況が、これも、G
I G Aスクールと関わり合ってるんですけど、「こころん・サーモ」実施状況という
ことですが、ちょうどコロナの厳しい時期に2学期が始まり、いろいろな議
論がありましたが、今日、こういう状況に至っております。

一方で、多額の予算、労力をかけて、一人1台のタブレットを入れたわけでありま
すが、そういう中で現状を各地でどのような取組・運用・トライアルがなされて
いるか。そのことについて、現況の報告をしていただくということ。

それから、「こころん・サーモ」につきましては、オンラインでの学習というのは
G I G Aスクールの一端でしかありませんので、こういう表層的なものでなく、情報
の蓄積というようなI C Tのよい面を活用した中で、子供の心を支えていくという、
この取組についてどんな状況かということを確認していくということになります。

また、スクール・ミッションのほうについては、文科省から示された中で、本市と
してもスクール・ミッションとはどうあるかという大きな話もありますので、今日は、
確認の意味合いも大いに強い、そういう機会もございますが、また意欲的な意見交換
をしていければと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、最初の議題、まず、「G I G Aスクール構想」に基づく西宮市の教育の
情報化の現況について、教育委員会より説明をいただきたいと思っております。

○事務局 失礼いたします。

本日は、「G I G Aスクール構想」に基づく西宮市の教育の情報化について、環境
整備と活用状況の現況を御報告させていただきます。

まず、通信環境でのハード面の整備状況です。

児童生徒に対する一人1台の端末の配備は、既に、令和3年2月末をもって全校で完了しております。

配備を開始してから、課題として顕在化した児童生徒用のパソコンのインターネットを含む接続が遅くなるという問題を解決するために、令和3年度当初より、新たに各校へ光回線を引き込む工事を行ってございまして、既に完了しております。このことにより、校外からのインターネット接続に対する不具合は解消され、通常の授業を行うに当たり、不自由のないレベルに改善されております。

次に、利用環境を支えるソフト面の状況です。

当市はGIGAスクール構想に基づき、児童生徒一人1台端末を実現しましたが、端末配備に終わることなく、西宮市の目指す教育の情報化の方向性を示し、その活用について市関係部局の様々な取組を横断的にまとめたGIGAスクール・スタートパッケージを制定いたしました。

なお、スタートパッケージにつきましては、運用開始からの状況を踏まえて、今年度末に改定版を公表する予定としております。

また、教員に対しても、これまで端末利用に係る様々な研修を実施しておりますけれども、今年度も引き続き、指導主事が学校に訪問し、授業で活用できるコミュニケーションツール及び利用方法などを中心に研修を支援しております。

利用実績として、GIGA端末の起動回数をお示しさせていただいております。起動回数は、GIGA端末がネットワークにつながっている場合にカウントされるために、特に、校外環境で接続した場合は、カウントに含まれておりませんので、実際より少ない値になっていると思われまます。

1学期については、校内利用が一月当たり5回程度、2学期に入ってから校内利用が約7.6回。校外利用を含めると、約8.6回となっており、活用は徐々にではありますけれども進んできたと言える数字が出ております。

次なんですけれども、具体的な活用シーンなんですけれども、既に、西宮市のG I

GAスクール構想を紹介するサイト内に、これまでの取組事例を公開させていただいております。ここでは、その一例を紹介させていただきたいと思います。

個々の事例紹介に入る前に、西宮浜義務教育学校での活用風景を1分程度の動画にまとめておりますので、御覧いただきたく思います。

これ、ちょっと分かりにくいですが、教員が教室前方にある電子黒板に投影している画面を生徒が持っている端末にも同時送信しておりまして、生徒がより見やすい状態になっているというような状況です。

こちらは、グループ活動をしているんですけども、グループごとに意見をまとめて、発表する際の意見集約ツールとして、それぞれ端末を使っているような状況です。発表のときの資料も同時に、ここで作成しているような状況です。

次、休み時間の光景なんですけれども、それぞれのペースでやっています。彼女はノートで勉強しているんですけども、前の子は端末を使っていると。

前期課程、小学校の課程の方も調べ学習等々で端末を今、活用して行っている状況です。

1分程度の動画でございました。

引き続き、事例紹介に入らせていただきます。別添資料2を御覧ください。

こちら、小学校2校で接続して、外国語の授業を行っているという風景でございます。いつも一緒にいる友達との英会話に加えて、他校の児童と英語で会話することで、顔なじみのお子さん（英語で）しゃべるとちょっと恥ずかしいようなこともあると聞いておりますけれども、他校のあまり顔を知らないようなお友達とお話することで、英語で会話することの、恥ずかしさも軽減されて、また、自分の学校の状況を初対面の相手に伝えるといったようなこともあり、より今までよりも意欲的にこの課題に取り組めたというような報告を受けております。

次、別添の資料3の事例でございます。総合的な学習の時間での取組内容でございます。

内容は、地域の成り立ちから住んでる人々の思いを調べて、現在の地域の課題を分析して、未来の地域について考えたことを班ごとにまとめて発表するといったような内容です。

発表時に使うプレゼンの資料について、それぞれが調べてきたことや、発表の資料の分担したところを持ち寄って、みんなで作って上げていくといったような作業を今、行っているようなところでございます。こういうところですね。みんなで作っているようなところでございます。

別添の資料4の事例でございます。チームズを使った双方向の生徒総会ということで、今までは体育館などで生徒全員が集まって、生徒総会というのを実施していたんですけども、コロナ対策により集まることができなくなったため、オンラインを使った生徒総会を行ったという事例をここに挙げさせていただきました。

終業式などの全体集会であれば、今までも行ってきた一方通行の放送形式というのでいいんですけども、今回、ウェブ会議システムの特徴であります双方向の通信を活かしまして、質疑応答など、従前とほぼ同様の総会を実施したといったような事例でございます。

次、別添の資料はないんですけども、こちら、低学年の利用シーンということで紹介させていただきます。

こちら、小学校2年生の生活科単元の「まちたんけん」という單元の中で、GIGA端末を利用した例として取り上げさせていただきました。

この單元内容なんですけれども、校区内をフィールドワーク、探検しまして得た情報をまとめて、また発表するというような内容なんですけれども、このまとめるときに使った、この写真、素材として写真をいろいろと活用してございます。この写真は、タブレットのカメラ機能を使って、それぞれまちで撮影してきたものを活用しておりまして、まとめに必要な写真を学校で印刷して、模造紙に貼り付けて記入して、発表資料を1枚に作成しているような状況でございます。

このように低学年でも、G I G A端末の活用が見られておりまして、こちら、デジタルとアナログの融合が図られている好事例ということで、今回、紹介させていただきました。

次なんですけれども、家庭での利用につきまして、少し御紹介をさせていただきたいんですけれども、スライドは準備してございませんけれども、別添資料の5と6を御参照いただきたく思います。

資料5の内容なんですけれども、音楽の授業において利用したという事例でございます。リコーダーの演奏が制限されている中、家庭で児童がリコーダーの練習の成果を動画で撮影いたしまして、それを提出することで、教員が成果として確認する手法を紹介させていただいております。

資料6は、クラス代表児童によるブックトークの発表と、それから放送システムの活用の事例なんですけれども、こちら、児童全員がまずブックトーク用にプレゼンテーションを作成しておりまして、この作成の手法なんですけれども、校内だけでなく家庭での宿題用につくられているということで聞いておりましたので、今回は、家庭利用の事例として紹介させていただきました。

このように、様々な形でG I G A端末が活用されてきている状況の中、教員からG I G A端末は発表ツールの一部として児童に定着しつつある。児童からは、こんなこともしてみたいといったアイデアがどんどん出てきていて、児童の意欲と学習の広がりを感じられるといったような声も聞こえてきており、今後も様々な場面で活用がされるものと期待しております。

続きまして、通常時ではなくて非常時、学級閉鎖など臨時休業といった非常時の対応も、G I G A端末を用いて行ってまいりました。

事務局として、感染拡大が広がりつつあるときに、I C Tを活用した学習保障の方法を具体的な手法も交えて通知を行っております。

まず、非常時の対応といたしましては、出席停止になっている児童生徒に対する個

別対応と、それから、学級閉鎖など多数の児童生徒に対する場合の対応と、大きく分けて2種類あると思います。

個別の対応といたしましては、取り得る学習保障の手法といたしましては、今までどおり学校と電話でのやり取りとか、あと、課題のポスティングなどの手法に加えて、GIGA端末を用いて、ウェブ会議システムで顔を見ながらのコミュニケーションを図ってみたり、課題としてデジタルドリルの演習問題を指示したりと、手法も増えてきております。

校内のネットワーク環境も改善されたこともありまして、該当児童生徒が在籍するクラスの授業のライブ配信することも可能となっております。

なお、ライブ配信については、一定条件を整える必要がございますため、現時点では無条件・即時対応というのは難しい状況となっておりますことを申し添えます。

次に、学級閉鎖の対応として、この8月末から9月の緊急事態宣言中に、1週間という長めの学級閉鎖が発生した学校の事例を紹介させていただきます。別添の資料の7の内容になります。

1週間の学級閉鎖となった当該学級では、学習保障として、オンラインを用いた授業形式を取りました。基本的な形として、午前中に国語と算数の2教科をオンラインで行い、午後は家で課題を行う形というので1週間やってこられました。ただ、教員と児童が慣れてきた頃に、午後にも少し、オンライン接続を行っていたと報告を受けております。午後の内容は、運動会が近かったということもあって、運動会のリレーについて、打合せを行っていたというふうに聞いております。

通常でしたら、こちら、デジタルテレビがあるんですけども、この教室前面にデジタルテレビが学校には置いてございまして、これに映し出すために、いろんな資料を映し出すために使っているこのパソコンを今回、先生の授業配信用として用いております。パソコンにももちろん、カメラはついているんですけども、より広く黒板を情報をいっぱい映すために、ちょっと見にくいですけども、パソコンの上に小さく

外付けのカメラを広角ウェブカメラを用いまして、できるだけ広く、黒板の字が映し出されるような工夫をされていました。

該当学級に在籍している児童、また、保護者の方々に授業再開後に御意見を伺っていただきましたところ、おおむね好評だったと伺っております。

詳しい内容は、別添の資料をまた御覧いただきたく思います。

以上、「GIGAスクール構想」に基づく西宮市の教育の情報化の現況についての報告を終わります。

○石井市長 はい、ありがとうございました。

総じて、2学期以降、いろいろ現場で頑張っていたいて、やっていただいたというようなことかなと思います。というふうに思いますが、まだまだ発展途上のところがある。そういうようなところであると思います。

教育委員の皆さんから、御質問なり御意見なりをまずお聞きをするというふうにしたいなと思います。順に長岡さんからお願いします。

○長岡教育委員 はい。御報告ありがとうございました。おおむね、うまくいっているということで、とてもいいと思います。

先日、たまたま小学校の先生とお話しする機会があったんですけども、同じような御意見をいただいています。

1つは、個別で、自分のペースで勉強ができるということで、主体的にもなったと、調べるときには自分でさっとタブレットを開いて調べものをしているというようなことで、とてもいいと。

それから、思わぬところで子供たちが使っている。例えば、図工の授業で何を描いたらいいか分からない。イメージが湧かないといったときに、さっとタブレットで調べてみたら、こういうことなんだという感じで図工の絵を描くのが進んでいる子供もいたということで、とてもうまく機能しているんじゃないかなというふうに思いますが、一方で、やはりモラルのところをどんなふうに教えていっていいのかというところ

ろが迷っているというようなお声を聞いたのと、それから、毎日持って帰るので、やはり傷む、どんどん傷んできて、表面がひびが入っているような画面にひびが入っているような子供もいるんだけど、修理に出せばいいんだけど予備がないので、そういうこともできない。そういうところで困っているというようなお話を聞いたので、その辺りも課題なのかなというふうに思います。

セキュリティのところと、それから、学校ではきちっと整備が整っているということなんですけれど、家庭のW i - F i の整備なんかがどの辺りまで進んでいるのかな、その辺りの格差はないのかなというのが心配な点があります。この辺はしっかりと乗り越えていかないと進まないと思うので、整えないといけないなと思います。

それから、市長からも発展途上という話がありましたけれど、大学・短大では、教職課程の学生が小中高の教員免許を取得するときに、このI C Tを活用した教育に関する科目の履修を義務づけられるようになっていきます。ちょうど来年度のシラバスの作成する時期にも大学は来ているんですが、そのときに、教職課程の科目を担当する教員は、これらに関する内容を授業の中に盛り込むべきだというふうに言われているので、先生になる卵の学生たちも、そういうことを学んで出ていくということになってくると思います。

その中では、特に情報活用能力をきちっとつけさせることと、それから、やはり情報を取り扱う際のモラルについて、しっかり教えられるようにというようなところもポイントになっているので、どんどん質に関してはよくなっていくのではないかなというふうに思っています。

以上です。

○石井市長　　はい、では続いて御意見を続けていただきましょうか。

では、側垣さんお願いします。

○側垣教育委員　　御説明ありがとうございました。

予想外にというか、学校での利用が活用されているんだなという報告を受けて、安

心したというか、皆さん努力していただいているんだなということで、これまで、コロナの状況の中で、実際に私たち、現場でこのスライドでの説明よりも本当は実際に学校に行って、利用状況をこの目で見せていただきたかったなというふうに思っていますので、また来年度でも、もし機会がありましたら、そういうところを見せていただきたいなというふうに思っています。

私のほうでちょっと思っているのは、さっきの長岡委員からのお話がありましたけれども、これを導入するときには、やはり全ての子供たちが同じ条件で学習できるような環境を提供することというのは必須だというように思っています、学校ではそのような形で活用して進んでいるんですけども、家庭での利用がどのような状況なのか、かなり家庭環境であったり、あるいは家族関係だったり、その中で利用がなかなかうまくいかないような子供たちもいるのではないかなと、その辺りへのそういうふうな家庭の状況の把握と、それから、そういう子供たちのサポート、それを今後どのようにしていこうかなということが気になっています。

今、本当に始まったばかりなので、試行錯誤をしながら皆さん苦勞して努力していただいているのですが、将来的に、西宮のこのICTを利用したGIGAスクールが、どのような方向を目指すのかという大きな目標をやはり皆さんがイメージを持ちながら進めていくことというのは肝心なのではないかなと、そういうふうに思いますので、ミクロとマクロ、両方を見据えながら取り組んでいただけたらなというふうに思います。

私は今のところ、そういう感想を持っています。よろしく願いいたします。

○石井市長　はい、ありがとうございます。

続いて、藤原さんお願いします。

○藤原教育委員　はい、御説明ありがとうございました。

うちにいる小学生に、実際にどういうふうなことを学校でやっているのというように聞いたら、一番多いのは調べものだそうです。例えば、ごみはなぜ減らないのかと

か、ごみを減らすにはどうすればよいか、みたいなことを先生がテーマで上げている。それを調べてというようなことやっているそうです。その例をパワーポイントでまとめて、資料をつくるというようなことを小学校4年生はやっているというのは、なかなか我々からすると驚きだなというふうに思う次第です。

あとは、休み時間の活用のことが出ておりましたけれども、休み時間にうちの息子のクラスがやっているのは、スクラッチのプログラミングをやって、それでゲームで遊んでいるということらしくて、スクラッチのプログラミングができる子がクラスに何人かいて、息子はそのうちの一人で、ちょっとそこではいい顔ができるというふうに自慢しておりました。

そういった中での活用状況なんですけれども、これが始まる時にお願いした、どんどんいろんな活用方法というのが出てくるでしょうから、それをどんどん共有して広げていくというふうなことをお願いした点、こういう形でいろんな活用方法が出てきている。それが、共有されているというのはいいことだと思います。

確か、他市、どこかの別の市の事例で、子供の中でICTにたけている子に指南役をむしろ任せるというふうな事例があったと思いますが、これなんかは、すごくいいのかなと思います。時に、ICTにたけている子というのは得てして、例えば、スポーツで活躍できるようなキャラクターではなかったりするんで、別の意味での活躍の場を与えてあげるということでいいのかなと思います。

西宮市では、このICT機器にどっぷりはまるでもなく、排除するでもなく、位置づけとしては適正なところなのかなというふうに考えております。

懸念点として2点ありまして、1つは、皆さん御指摘されている各家庭での利用状況のインフラが整っているのかということと、もう一つは、目のことですね。今年、みやっ子アイケアというのを言っていただきましたけれども、いわゆる20-20-20ルールをもっと学校の現場で徹底するといいますか、浸透していけば、さらにいいのかなというふうに考えております。

以上になります。

○石井市長 ありがとうございました。

共通するところで、ちょっとまた教育委員会から御返答をいただきたいんですけど、家庭の状況による格差に対する対応、特に今回の場合、ポケットW i - F i の貸与というようなことがありましたけど、その備えと状況がどうだったかということが1つですね。

それからあとは、家庭で回線がつながってなくても宿題を持って帰れるものにしたわけでありますから、ちょっとその辺りについての説明と併せて、さっき調べものというふうにおっしゃって、それを長岡さんがモラルのことでおっしゃったんですけども、西宮ではありませんがちょっとこの機器を使ったことによって、子供同士のいさかいのようなことがあったりとかしましたけど、この辺のこのフィルタリングをどのくらいかけてて、そうしたことに関してどういう対応の想定をしているか、ちょっとお願いします、3点。

○事務局 失礼します。

W i - F i ルーターなんですけれども、今、1, 200個を我々で抱えておりまして、こちら、非常時、休校等になったときに、家庭にどうしても環境がないようなところに貸し出すといった体で使っているんですけども、先ほどのような、今回の長期になったときに、1件貸出ししました。特殊な事例ということで、御家庭ではなくて、児童の預け先にちょっとなかったというように聞いております。そこのために貸出しを行った。それまでも、そのお子さんが長期で休まないといけないような場合に、学校から申出を受けて貸出しを行っておりますので、毎月、コンスタントに何個かは、ちょっと今ごめんなさい、数字は持ってなくてきっちり答えられないんですけども、毎月利用をしているような状況はございます。1個目はこれですね。

家庭でネットワークがなくても、通常時は使えるような状況になっているところなんですけれども、先ほどちょっと上げました起動回数のところには、どうして

もそういうところは上がってこないんですけども、やはり一定、家庭でドリルをダウンロードして持って帰ってもらってやるというような事例を何件も聞いております。

最後、モラルのところなんですけれども、G I G Aスクール端末に関しましては、端末にフィルタリング、インターネットのフィルタリングソフトを入れておきまして、基本的には変なところには行けない。特にSNS、ツイッターとかインスタグラムとかは、まず、切っている状況。あと、一般的な怪しいサイトには行けないような状況にはなっているという形になっています。

あと、コミュニケーションツールとして、今、マイクロソフトチームズというのを使っているんですけども、子供たち同士、1対1になるようなチャット、いわゆるチャット機能は、機能としてそもそも使えないようにしてございます。先生が生徒に対しての1対1もできない。生徒は秘匿性の方にメッセージのやり取りというのは、できないような状況になっております。

モラルに関しては以上です。

○石井市長　はい。そういう意味では、非常時に関しては貸し出しをするということで、格差を埋め、わざわざ某社ではなくて、マイクロソフトのOSにしたことによって、ちゃんと持って帰って学習できるような環境も整備し、実際それが機能していると、さらには、モラルを教えるということもそうですけれども、この強制的にフィルタリングをかけて、物理的にそうした回路に入るといようなことがないような環境をつくって今までやっているという、こういうようなことでございます。

このあたりの点について、追加で質問とかあれば。

はい、側垣先生。

○側垣教育委員　今の御説明ありがとうございます。

少し、ちょっと細かいところかもしれないんですけど、例えば、子供たちが課題を持って帰って宿題をする。それをまた学校に持って来て、先生方が宿題をしたのをチェックするような形でチェックをされるというところですよ。それはやはり、今まで

の宿題をやってきたかやってきてないかという、同じような次元で判断して、子供の状況を把握されているということなんですよ。そこに、この子の家庭環境がどうなのかというところ辺までは、先生方は注意されて見ていらっしゃるのでしょうか。ちょっとそこを心配で、できてないこの子はなかなか進まないねというところ辺のところでのサポートというのは、具体的な事例というのは上がってきてますでしょうか。

○石井市長 答えられますか、事務局さん。

○事務局 基本的に、その宿題、いわゆるプリントでやるとかというふうなのと同じようなことですので、当然、担任のほうは、その子の家庭状況等々分かっておりますので、そういったところで適切に対応しているかと思えます、はい。

○石井市長 はい、側垣さん、いいですか。

○側垣教育委員 はい、分かりました。

○石井市長 スタートしたばかりの段階でもありますので、将来的にはそこはどうかかなと思うんですけど、ちょっと今日、教育長から佐々木次長に、現状で思いますが、ちょっと高いツールを用意したんで、とにかくまず、しっかり触るようなというような考えなんですけど、結局、1年、2年たったときに、これをするによって教員の労力が減ったとか、子供の新たな学びが個別化になるなり、新たな知的好奇心を刺激したというようなことになったらいいんですけども、何か重いものを毎日持って行かせて、厄介なことになってはいけないというようなことも正直思うわけですが、そういうような観点で、この現状、今、始まったばかりのところではありますが、教育委員会をつかさどる教育職のほうとして、現状の今のところをどう見ていらっしゃるかということを感じることになると思うんですけども、お話しただければなと思います。

○佐々木教育次長 それではすみません。次長の佐々木でございます。

まず、私の方から見てきたことを御報告したいなと思うんですけども、今年、教

育長と私のほうで、たくさんの学校を回らせていただいて、その都度、端末がどのように使われているかなというようなことは、ちょっと注目しながら見ておりました。見ていて、一番いいなと思ったのは、先ほどの例の中にもあったんですけども、1つのクラスで、ある子は端末を開いている。ある子は端末を開いていないような状態で学習が進んでいるんですね。だから、子供たちの中に、必要に応じて端末を開くということが、もう既に導入から半年とかを経る中で、そういう場面が出てきているのかなと。多分、スタート時点では前に立っている先生が、はい、端末を開いて何々をして、はいこれ調べてというような形で順次やっていたと思うんですけども、学習が進んでいく中で、個別の進度に合わせて端末を使うという場面が出てきているかなというふうに思っています。

ただ、本当に始まったところでございますので、私のほうからも研修課のほうとかに、とにかくグッドプラクティスをたくさんため込んで、それを全市で共有できるようにしてほしいということをお願いしておったんですけども、そのとおり今、動いてくれて、どの学校のどの授業でどんな取り組みがなされているということを市内で共有できるような地盤ができておりますので、それでさらに広がってくれたらいいかなというふうに考えているところです。

あとは、本当に私たちもそれぞれの子供たちが自由にアクセスできるような形をしてあげたいという思いがやっぱり強いんです。だから、何か事象、よくない事象が起きたときに、やはりシステムのせいとかにしてしまう傾向が強いと思うんですけども、やっぱりそうじゃなくて、情報モラルというものをしっかりと子供たちの中に教え込んでいって、それぞれの子供がきちっと判断できるようにしていくのが一番の理想かなと。だから、最低限のフィルタリングとか、そういったものは必要だとは思いますが、そこから先というのは、やっぱり個々の子供たちの学び、伸び、そういったものに期待していけたらありがたいかなというふうに思っているところでございます。

以上です。

○石井市長　教育長はいかがですか。

○重松教育長　私のほうからは、これを入れるときに、研修課といろいろ話をしました。まず、先生が自由に使えることが一つの原則だというように思います。その中でどう使うかというのがあるんで、まず、先生自身が使えなかったら全く授業に使うということができません。ですから、その部分が一つ大切かなと思ってます。そこでかなり検証していただいたんで、先生たちも事務でかなり使われるようになっていし、その前に既にコンピューターが入っていたので、電子黒板を使ったりしてやりました。その意味では割と西宮はすっと入ってたかなという感じがあります。実際、それぞれの学校を見て回っていてそう思っています。

ですから、後は、これをどう使うのかということを考えていかなきゃいけないんじゃないかなというのを見ていて思いました。

それからもう一つは、情報を取るときに、どこから情報を取るかというのが1つ大きな問題だと思います。私も、いろいろと分からないときに、すぐインターネットを引くんですけども、ウィキペディアがいいのか、それともちゃんとした百科事典の情報を取ればいいのかというのもあります。逆に映像はとか、ある場面にアクセスすればすぐにその場所が見られますので、ある意味ヨーロッパのどこどこ地名を入れたら、その街並みや地形を見ることはできます。そういう意味では、非常にこの情報の取りやすさがあります。これからは、情報をどういうふうどこから取っているかというのは、非常に今後、大事になるのかなというように思っています。ですから、ある偏った情報ばかり集めてくると、偏った情報での話し合いになります。そこで話し合ったことが正しいのかなということになります。先ほど言ったりテラシーの問題とも絡んでくるんでしょうけど、そこを今後どうしていくかという問題も一つあるのかなと思ってます。

それから、調べたときにすぐ答えが出てきますので、そのときは答えられますけれ

ど、ある程度時間が経つとすぐ忘れちゃいます。これから大事なことは、それを元にしてどう考えてどうするんだという、次の展開をしていく必要があるのかなということ今回、非常に思っています。ですから、見ただけで、はい終わりというのではなくて、そこをどう使えるかというのは非常に大事だなというように思います。ですからできる限り、情報を取るというだけじゃなくて、その体験だとか実際にそれをやってみてみるだとか、人間の五感を使ってそれをやるのが大切です。ワープロが入ったときに、ワープロを打ったらいろんな漢字の変換ができますけど、最近、NHKなんかによくあるように、漢字の変換がよく間違えてて、失礼しました間違えてましたとよく出てきますんですけど、あれはやっぱり簡単に変換するので、間違う状況が出てくるのかなというふうに思ってます。ある意味、実際に字を書いたりだとかということも必要ではないでしょうか。ですから、コンピューターを使って、データができたなら、それを1回ノートに写すだとか、新たにもう一回ノートにまとめ直すとかという作業も必要です。そのことによってきちんと理解できるという部分があるのかなと思います。

ただ、非常にいいのは、ドリルをやったときにすぐ答えが出てくると、どのくらいできたのかが分かるし、そのデータが蓄積できるので、それを今度は学校へ持ってきて学ぶということが非常に大事になります。その意味では、使い方によっては非常に大きな成果が出るのかなということを思っています。

最後に、このコンピューターの持ち運びの問題があります。一応は、必要以外の物は学校へ置いておいてもらって、コンピューターを持ち運びしてほしいというのは言っていますが、これからはそういうことにならないように、西宮は昔からかばんを全部置いておくという時期があったんで、それを推進するというのは、必要以外の物は学校へ置いておいて、持って帰らないといけない物は持って帰ってもらってコンピューターをうまく使うことと、ノートを活用したりすることと、併用していければいいかなというように思っています。

ただ、今、スタートしたばかりなんで、いろんな試行錯誤をしながら、広いデータを集めながら、実際にそれを啓発することが非常に大事だというふうに私は思っています。

以上です。

○石井市長　　ありがとうございました。

冒頭、今日、この話題を取り上げた中で、スタートした中で、どういう立ち上がりかというようなものの確認のことでもございました。

今、教育長から変換の間違いみたいなのが、これが減ったことによって、ちょっと退化してしまう可能性があるとか、目の退化の可能性もあるかもしれないというようなことでもあろうと思いましたが、やっぱり、市当局としては、どうしても財政のことが気になって、6年後に文科省がはしごを外したら、さて今度はどうするんだろうかと。そのときに低学年は、もう1万円ぐらいのタブレットのことで事足りるとなるのか。やっぱり中学生は、もっとハイスペックのものがいいとなるのか。いやそうでなくて、もうそのデバイスは、もうそれぞれのうちに基本的にあるから、よっぽどでなかったらデバイスを配るといような選択がなくてもいいんじゃないかとか、それに置いては、今、佐々木さん、グッドプラクティスとおっしゃったんですけども、どの部分をどう使うことによって、何が楽になって何が前進したかというのを今すぐ出せというのは当然出てまいりませんので、2年後、3年後に向けて、そうした部分をぜひ意識をしながら、成果は何かというようなことだと思います。

この点、副市長からありますか。

○北田副市長　　いいですか、意見というか、はい。副市長の北田ですけれども、今日、実際の活用の様子を見せていただいて、ちょっと安心したというのが正直なところなんです。最初、コロナ禍での休校時、一斉休校時等の対応をオンライン授業でせよみたいなそういう世論といいますか、そういうのを非常に高く言われて、それだけじゃ多分ないんだということが、こういう実例を見せていただいて、非常に実感とし

て、ああよかったなという感じになってまして、特に、平常時での使われ方、非常に多様な使われ方をしているというのを今日教えていただいて、本当にありがたかったと思います。

その中で、特に印象に残りましたのは、オンラインだけ、あるいは端末の中だけで終わらない使われ方、特に、アナログとデジタルと、両方をミックスして使っている使い方、それともう一つは、印象的だったのは、単に授業の中だけで使うんでなくて、児童総会等で子供たちの活動の中で、それが工夫して使っていていただいていると、こういうところが非常によかったかなというふうに思っています。まさに、多様な選択肢が提供できているという実例を今日見せていただいたというふうに思っています。

ただ、ちょっと心配し過ぎかもしれませんが、これ、どんどん進んでいくと、先ほど藤原先生のところのお子さんのように、そういうことにたけたお子さんと、実は、そういうのがあまり得意でないお子さんの格差みたいなものが出てきやしないかなというのが、ちょっと私なりに心配ごとで、それともう一点の心配は、今日すごく手作り感が、今日の活用の中でも出てきていると思うんですよね。非常に先生、工夫されているように思うんです。ただ、手作り感を一生懸命に出していくと、やっぱり先生方の負担がどんどんどんどん増えていくんじゃないかと。これもすごく心配事なんです。先ほど、市長が言われた家庭での格差のハードの部分は装備を調えることで一定クリアできると思うんですけど、その使われ方の中での格差、マイナス面ですね。これはできるだけやっぱり、それを解消していく方向で、バックアップを教育委員会が主体となってしていただかないかなんかと思ってまして、特に、子供さんたちの変な格差がでないようなこと。それと、先生方に過重な負担がかからないようにすることについては、ぜひ、せっかく入れた機材を一生懸命に使っていく中で、クリアしていただきたい課題かなと思いましたので、ぜひ、その点を含めて進めていただくようお願いしたいと思います。

私からは以上です。

○田村副市長 正直、感想レベルにはなるんですけど、非常に順調に活用が進んできて、これからも活用が進んでいくんだろうなというのを聞かせていただいたんですけど、先ほど、長岡委員が触れておられたように、どんどんどんどん活用が進むという故障というのも出てくると思う。先ほどの意見の中で、予備が少ないからそのまま使うんだみたいなお話もありましたけれども、これ、どんどんどんどん活用が進んでいくと故障とかそういったものにもケアをしていかなければならない。そういったところが多少気になったところではあるかなというように思います。

○石井市長 はい、今日は、現況を確認するということでありましたので、この辺りにとどめておきたいと思います。

一方で、今、田村さんが言ったことと私が言ったことと関わることで、子供が例えば、うちにあるデバイスから入りたいと言ったら、別に持って帰らなくてもいいから、それでもいいようになるのであれば、そういうようなやり方も可能性として今後あるだろうし、それから、今日はあえて特出しはいたしませんでした。やはりオンラインでつながるということは、学校に来にくい子供にとって、これというのはとても大きな役割を果たす可能性があります。今、これ現在進行形であると思いますので、この辺りについては、もうちょっと蓄積してからお聞かせいただきたいなと、あとは、特別支援学校についても、i P a dをわざわざ入れるというようなことがございました。それについても、まだ全体がこういう状態ですから、今から蓄積をしていくことだと思いますけれども、これはまた、それなりにしっかりと蓄積された時点で、お聞かせいただきたいと思っておりますので、その辺りについてはお願いしたいと思います。

1項目めについては、特にどうしてもというのがなければ、現況を確認できたというのであります。

はい、藤原さんどうぞ。

○藤原教育委員 藤原です。

学級閉鎖でしたか、学級閉鎖時のオンライン授業で保護者からの声で、特に困った

ものはなかったということをおっしゃいましたけれども、何かアンケートなどがとられていたのでしたら、もう少し具体的に、どんな声があったのかといったところを教えてくださいとありがたいです。

○石井市長　教育委員会さんどうぞ。

○事務局　失礼します。

学校でアンケートをとってもらったと思うんですけども、その中で、先生と子供と、それから、保護者の声というのを聞いておきまして、その中で保護者の中では、すぐにオンラインに、休校が決まった、学級閉鎖が決まった段階で授業をしてくれたからよかったというようなお声。始まった当初に接続がちょっとできなかったというようなお声があったらしいんですけど、保護者同士でサポートし合って、連絡を取り合ってサポートしてできたというようなお声も聞いております。

先生の声とかでは、チームズで先に練習しておく大切さを感じたですとか、初めは不安でしたけれども、はじめてみると授業をできるなと思いましたとか、あと、ミマモルメでも連絡をしてたんですけども、なかなかタブレットを開いてくれない児童もいたので、学級閉鎖になったときはチームズを確認するなどの先のルールづくりをしておく、もっとスムーズだったんじゃないかとか、あとは、保護者が心配ごとを子供の端末を使ってちょっとやってきたというような事例もあったので、保護者の連絡方法は一本化したほうがいいんじゃないかというような御意見をいただいたりとか。

あと、子供さん、児童の感想としては、ここマイクをオンにしてカメラをオンにしてやっていたんですけども、意外と騒がしかったけれどもいつも通りで楽しかった。あとは、みんながマスクを外しておうちでやっていたので、マスクなしの顔が見られてよかったとか。時々困ったけど楽しかったとか、いつも手を挙げづらい人も発表できてよかったとか。質問コーナーがあったんですけども、それもありがたかったとか、ふだんの授業よりも楽しかったというようなお声もありながらも、あとはマイナスの意見といたしまして、家の環境で音がちょっと聞こえにくかったと

か、マイクがちょっと使えなかったから、タイピング、字だけで頑張っていたのでちょっと困ったとか。あとは、家族の人に話しかけられて困ったとかいうお声もありました。

以上です。

○石井市長　　今、私がちょっと補足すると、グッドプラクティスという単語が出てきたということは、グッドプラクティスになっていないところも正直あるわけです。それで、今の最初、やった感想としてどうかというのだったんですけども、やる前の感想として、市長に市民の声として投げかけられたのは、休校になったのに全然つながってないじゃないかと言って、ある学校が立ち上がりが遅かったとかいうのは正直あります。ですので、今日はここは、教育委員会としてできているところ、やれているところがこういうところであるよというところなんですけれども、全部の学校が一番うまくいっているところまで、出来上がっていないというようなことも、正直にあらうと思いますけれども、ただ、西宮市の中では、それなりに回りつつあると、そういう意味で途上だと、そして、やったところの感想としてはそういうことであるという、こういうようなことでいいですか、教育長。

○重松教育長　　はい。

○石井市長　　そういうことでございます。

○重松教育長　　はい。

○石井市長　　では、1点目のG I G Aスクール構想につきましてはそういうことで。いずれにしても立ち上がりですね。本当に現場、御苦勞をおかけしますが、様々なところに目配せをして、そして、積極的な先生にはさらに積極的に、ちょっと踏み出すのを頑張ろうという先生は背中を押していただいて、よろしくお願ひしたいと思います。

それでは、続きまして、2番目の議題、「こころん・サーモ」の実施状況につきまして、教育委員会より説明をお願ひしたいと思います。

○事務局 失礼いたします。

「こころん・サーモ」実施状況について御報告いたします。

「こころん・サーモ」の概略のほうを最初に少し説明した後に、実施状況についてお話ししたいというように思います。

概要でございますけれども、「こころん・サーモ」は武庫川女子大学の河合優年教授と共同開発をいたしましたタブレットで行う児童生徒の心理状態チェックシステムです。

システムの特徴としては3つありまして、小学校から中学校へ経年で子供の変化を追跡できること、個人情報流出の心配がないこと、個々の子供の様子だけでなく、一定の集団の状況を知ることができるため、予防的な手だてを考えることが可能となる点です。

開発の経緯ですけれども、平成27年にスタートしております。主に前半部分は、武庫川女子大学がアンケート尺度を作成する時期でありました。尺度完成後、タブレットに実装する準備をいたしまして、この9月より各校で実施をしております。実施学年は小学校5年生から中学3年生。来年度からの本格運用といたしましては、年2回の市内統一機関を設けるとともに、それ以外でも、学校や学級独自で活用していくということを考えております。

実施方法は、児童生徒がタブレットを用いて4択のアンケートを回答していきます。全部で34の質問がありまして、およそ10分弱で回答をし終えることができます。

実際の画面がこちらになります。児童生徒はまずログイン画面で学年、クラス、出席番号と初回に設定いたしましたパスワードを入力いたします。そうすると、確認の画面が出てきます。この画面で、「答えたくない質問は答えなくてもよい」ことや「プライベートなことなので、人のアンケートを見ないように」といった留意点を載せてございます。

アンケート画面はこのようになっております。グーの絵をクリックするとパーの絵

となり、そこを選択したことが分かるようになっていきます。この場面が質問の個数であります34ページあるということになります。

最終画面がここになります。確認を押すと終了、それから、やり直すこともできるということになっています。これが、終了の画面です。

9月より各校で取り組んでもらっておりますけれども、まず担当の先生に動画による研修を行いました。武庫川女子大学の河合教授にお話をいただくとともに、運用についての説明を加えたものです。実際に子供たちが回答している風景が、こちらになります。操作に慣れている中学生などは、本当に時間をかけずにアンケート調査が終了いたします。

アンケート調査実施後、すぐに結果が分かるところが、「こころん・サーモ」の特徴です。この画像は教員のみが閲覧可能なレーダーチャートの画面です。児童生徒個人や学級、学年の平均もわかります。基準値というものが設定されておりまして、それを下回ると、そこが赤く表示されることになっております。

初めて実施する学校につきましては、全て指導主事が出向きまして、結果表示の見方なども説明しております。

現在の状況でございますけれども、約3分の2の学校が実施をいたしました。学校現場の反応といたしましては、34個の質問項目に対して、しっかりと因子分析で統計的に認められていることから、信頼の高いアンケート尺度だと言え、好評をいただいております。

また、従来、教師の経験値や勘といったもので児童生徒を理解してきております。これは、今後も非常に大切なものとして教師はもっておく必要がありますけれども、それに加えて、エビデンスに基づいた児童生徒理解も求められており、「こころん・サーモ」はその一助となります。例えば、不登校等の傾向がある児童生徒の結果を見ると、「ソーシャルサポート」や「自尊心」が低い結果が出ていることや、表面上では元気な児童生徒が意外に低い結果であり「ノーマーク」だったというふうな声も聞

いております。

また、Q-Uをはじめとする心理学的なアンケート調査では、児童生徒が紙媒体で実施することが多くあります。それを先生方が集計シートに入力し、診断する業者に送付し、後日、結果が送られてくるという流れになります。その時間差の中では、児童生徒の心の状態が異なっているといったことも考えられます。「こころん・サーモ」は即時のフィードバックが可能なことから、タイムリーな児童生徒理解につながります。現場の先生方よりすぐ結果を見ることができてうれしいといったような声をいただいております。

また、アンケート調査は、有償の場合が多いです。「こころん・サーモ」は無償であることから、実施する時期を考えず、何度も実施することができます。今、実際に、数回実施をしているといった学校もございます。

今後の予定ですが、「こころん・サーモ」は子供の心の状態を知るものなので、教師が個別の結果、学級や学年の結果をどのように捉え、どんな方法で子供へ働きかけていくのが重要となります。そういった面で、今後、結果を効果的に指導に生かす研修、そういったものを充実させていきたいというふうに考えております。

説明は以上です。

○石井市長 はい、それでは、順次、教育委員の皆様方から質問なり、御意見をいただければと思います。私自身は、これ本当に、これこそICTだというようなふうに思っているところであり、もう、この言うとおりの、うまく回っていればよいなと私は思っておるんですけども、教育委員の皆様方から御意見、御質問、そのほかいただければと思います。

長岡さんからどうぞ。

○長岡教育委員 まず、質問ですけども、1点目は、これは先生だけが閲覧できる。担任の先生だけが閲覧できるかということをお聞きしたいんですけど。

○石井市長 じゃ、どうぞ。逐一。

○事務局　　はい、教師のほうが開覧するということで、教師のみが開覧することができると思います。

○長岡教育委員　　はい、分かりました。ありがとうございます。

これが、専門の先生に確認しなくてはいけない内容だと思うんですけども、教育委員会でも発言させていただいたのですが、例えば、答えたくない場合は答えなくてよいというふうに、最初にきちっと説明をしているんですけども、もちろん答えない子は答えませんが、答えているうちにでも、何問か答えると、子供たちはやはり自分を振り返るし、内省するというか、自分ってこういう、今、状況なんだというふうになると思うんですね。なので、こういう形で表すかどうかは別として、自分が困難な状況であっても、それをどう乗り越えていくか、どう適応していくかというようなことも一方でそういった働きかけというか、そういうふうにも活用できるのではないかなというふうに思うので、その示し方は、まだこのレーダーチャートかどうかはちょっと分からないんですけども、そういったふうにも将来的には利用できないかなというふうに思います。

そういう意味では、何度でもというふうな先生からの答えがありましたけれども、何度でもやるという、そういった子供への精神的な負担とか、そういうようなところは専門の先生と、どういうふうに御相談されながらしているのかなということも、少し気になったところではありますけれども、この「こころん・サーモ」自体については、先生方のこれまでの知識や勘に加えて、客観的なデータから、きちっと子供をサポートできるということであると、とてもいいシステムだと思うので、うまくこれが動いていくように、ちょっと課題はいろいろあるのかなというふうには思いますけれども、成功するといいというふうに思っています。

以上です。

○石井市長　　はい、重要な点ですね。

今について、ちょっと返して何かありますか。

○事務局　　本当に長岡委員がおっしゃるとおりかと思えます。

まず、教育委員会会議でも長岡委員からその点をお聞きしてました。1つ目の点なんですけれども、子供たちが答えなくてもいいんだと、やるうちに（気分が落ち込んでいく）というふうなことを非常に心配だというふうなところではございました。教師に説明する説明動画の中で、やはり、それが終わったときの子供の様子をやっぱりしっかりと見ておいてほしいというふうなところは、お伝えしているところではございます。

それから、困難を乗り越えていくというところにつきましては、本当に、「こころん・サーモ」、心の今の平常時の自分の体温、それどうなんだというふうなところを自分自身が知る。そこに知るときに、ちょっと危険性とかというのをお持ちだなと思うんですけれども、そこでいうと、その一過性のものではなく、今ちょっと落ち込んでいるけれども、自分はいつもこんなんだとか、こういうふうなぐらいなんだということていくと、それを自分自身で乗り越えていく。もしくは、教師が適切に、どの部分を少しサポートしたらいいかというふうなところができればなというふうに思っておりますので、非常に大きな、大変難しい課題ではありますけれども、その部分をぜひやっていきたいなというふうに思っております。

以上です。

○石井市長　　はい、続いて側垣さんよりお願いします。

○側垣教育委員　　この最終ページにですね、このページに書いてありますけれども、因子分析を行った確かなアンケート尺度で、信頼性が高いということと、エビデンスに基づいた生徒理解が可能になったということ、それはそのとおりだと思うんですけれども、そのエビデンスの見方とか、こういう結果が出たから子供たちはこういう状態だよということに対しての指導というか、サポートですね。それをどのような形でされているのかということと、それからもう一つは、その結果を子供たちにどのような形でフィードバックして、先生方だけが知っているというわけではなくて、やはり、

子供たちが自分自身の状態を客観的に知るということも大切なので、子供たちへのフィードバックの方法をそれをどのように現在されているのかということについて、少しお伺いしたいなと思いました。

○石井市長　　はい、お願いします。

○事務局　　こちらも非常に発展途上といいますか、今、始まったところということで、最後に課題も言いましたけれども、本当にこれをどういうふうに見て、そして、どのようにして子供たちの指導に生かすかというふうなところにつきましては、河合教授とも共有しております、今から本当にこれだよなというふうなところになっております。ですので、概略的なところの見方というのは御説明をしておるんですけども、そのもう少し細かい部分であるとか、そういったところは今からの研修にかかっているかなと思っております。

それから、子供たちへのフィードバックにつきましても、やはり、河合教授とも話をしていっている中で、ダイレクトに当然子供たちは自分の体温とか心の状態を知るということは大切なんですけれど、それがどうなのというふうなところは、まだやはり、いろいろ課題があるなというふうなところがございますので、現段階では、教師のほうで把握をして、そして、全てぼーんと伝えるのではなくて、指導に生かしながらというふうな、現状はそういったところになってございます。

○側垣教育委員　　ありがとうございます。

私も、こういう子供たちの心の状態の調査というか、そういうふうなこともかつて、阪神淡路大震災の後の子供たちの心の状態についての調査というか、アンケート調査をしたことがあるんですけども、その結果をどのようにして、最終的にどのように子供たちをサポートしていくかという、具体的な方向を見つけていくことが一番重要だと思います。

ただ、こういうツール、ツールと言っていいのかどうか、こういう方法を工夫して、そういう機会をいろんな形で考えていくということは大切なことなので、今、課長が

おっしゃったように、今後ますます、その中身を高めていただきたいなというふうに
思います。ありがとうございます。

○石井市長 はい、ありがとうございました。

藤原さん、お願いします。

○藤原教育委員 御報告、ありがとうございます。

このお話を伺って、一番最初に感じたのは、先生方、本当に大変だなということ
です。先生方は一番の本来の仕事は、学習のことを看るということにあると思うの
ですが、その中から、児童生徒の心のケアを行うというところまで、当然仕事の中
には入ってくるんでしょうけれども、このシステムができたために、そこまで本来の
仕事になってしまうんじゃないかということになると、非常に大きなものを抱えてし
まうと、一筋縄ではいかないものを抱えてしまうんじゃないのかなというふうに、逆
に先生方の「こころん・サーモ」を心配してしまった次第です。

仮に、この調査の結果が、何か危機的なものが現れている児童生徒がいた場合に、
それは先生だけでは抱え切れない問題になってきて、先ほど、側垣委員が御指摘され
たように、子供にフィードバックする。さらに、家庭にフィードバックするというこ
とまで必要になってくると思います。こういう結果が出ているので何々君大丈夫とい
うことを本人なり、御家庭なりに伝えるということが必要になってくるのかなと思
います。ただそこで、申し上げたように先生方が抱え込み過ぎないようにするため
には、むしろ、うまく本人とか家庭にフィードバックということが重要になってく
るのかなというふうに考える次第です。

以上です。

○石井市長 はい、ありがとうございました。

児童生徒にこれをやってもらうこと自体に対する負担感もあるんじゃないかとい
うことや、その結果に対する指導のやり方、それから、子供へのフィードバックの在
り方とか、まだ発展途上ということですからけれども、とても期待がある部分と、今から

研究をしなきゃいけないというような中のところでもありますので、ポジティブな方向性ではあるけどポジティブ一辺倒ではないようなことで、しっかり研究、検討を進めて、前には進めていってもらいたいなと思うところですが、教育長か次長、何かありますか。

○佐々木教育次長　それでは、私のほうからまず、お答えしようと思います。

この、「こころん・サーモ」につきましては、私も少なからず、開発というか運用に関わってきた内容でございますので、申し上げておきたいのは、「こころん・サーモ」のもともとの目的は、子供自身が自分の心の状態を知るところが一番肝になってくる場所なんです。ですので、今後、だんだん使い慣れていく段階で、やはり、子供たち自身にその結果をフィードバックしていくということは、これ必ず必要になってくると思っています。その自分の心の状態を知るときに、どうもこういう心の状態を知るといって、へこんでいるところばかりに目が行きがちなんですけれど、実は、この「こころん・サーモ」は、生きて働いている部分が明確に分かるんですね。だから、今、この子はこの部分では落ち込んでいるけれども、ここの様子、ここの因子については非常にいい結果が出てると、そうすると、今度は学級経営とか子供たちを指導する段階で、その部分をさらに伸ばしてあげる。君は今、ここはすごくいい状態なので、この部分をもっともっと前面に押し出していこうよというポジティブな捉え方ができるというのが、開発者の河合教授の思いでもあったんです。だから、そういう形でのフィードバック、あなたちょっとしんどそうだねだけではなくて、あなたこの部分で頑張っているよね、というような部分を伝えていってあげるといっても必要になってくるのかなというふうに思っています。

そういった意味で、今回、研修をやったときにも、子供の様子を複数の先生が見て、そういえばこの子、ちょっと今、この辺、落ち込んでいるのがよく分かるから、明日にでも一度、呼んで話を聞いてみたらというような会話が、先生同士でなされたというようなことも聞いているので、そういう捉え方もできれば、先ほど申し上げたよう

に、いい部分もさらに伸ばすきっかけにも使ってもらえたらいいかな。そういうような使われ方も含めて、今後、研修を進めていけたらなと思っています。

以上です。

○石井市長　　はい、お願いします。

○重松教育長　　今、大体、佐々木次長が言ったようなことですが、一番の問題は、やはり心の問題は、結局外見からは分からないので、こういう意味でアンケート調査をするか、何かでメジャーで測らないと分からないという、そういう面では、今回のようなものがあるというのは非常に画期的かなと思っています。

さらに、先ほど言われましたように、負の部分じゃなくて、いい部分を伸ばしていく。ただ、学級形状の問題でこれをやったときに、何かあの子だけに集中して何か当たっているよなというようなことがあれば、そこで調べれば、人と人のつながりの関係が分かってくるんで、その意味でも大きいのではないのでしょうか。

今、いじめの問題については、アンケート調査、学期ごとに3回、学期ごとにやっていますけど、これが逆に言えば、代替できるということにもなりますんで、こういうことをやっておけば、子供たちの様子が分かるし、その様子が分かれば、それに対して学級の先生も、スクールカウンセラーとか、ソーシャルワーカーと連携しながら、子供たちとの関係をしっかりつくっていけばいいので、そういう意味では非常に大きな対応だと思っています。

本当に一番は、よく言われる先生の勤だとか、何となくおかしいなというのができればいいですけど、なかなか、それも難しいので、そういう意味ではこれを使うことによって、子供たちの様子も分かるし、また、先ほど佐々木次長が言いましたように、子供たち自身が自分で測るんで、心の自分の状態が分かるということも、非常に大きなことです。ただ先生が解釈をするんじゃないんで、子供たちにも自分たちに介してやるというのを一つの手だてとして活用できるといいなと思っています。

ただ、この開発までに、いろんなところで発表して、いろんな意見をもらってきて

いると思いますので、これについては、十分に活用すれば、いい成果が上げられるかなと思っています。ですから、これからの活用の仕方によってというか、も、十分にやっていたらと思っています。

以上です。

○石井市長　これをやることによって、先生の心の健康もというふうにいただいています。藤井さん、お願いします。ちょっと折角ですから。

○藤井教育次長　「こころん・サーモ」ですね、中学生の子供が私のところにはいるんですけども、たまたま明日の昼から「こころん・サーモ」あるねん、それだけ言って学校へ行ったんですけど、何を思ってそう言って出かけたのか分からないですけど、親としてそうやって聞くと、今、教師が把握して指導に活かしてもらったというお話だったんですけど、やっぱりそういうことを聞くと、親も今の状態どうなのかなとか、そこの返しがなかったので、うちの子は何もなかったんだろうなというふうに思ったんですけど、何かあれば、やはり保護者へのフィードバックなんかも、ちょっと考えていただけたらなというふうには思ったんですけど、ちょっと感想ですけど。

○石井市長　そういう意味ではね、お子さんもそういうふうに言われたという、とってもセンシティブなことでもありますし、佐々木さんが言われたことがそうかと、そのフィードバックというのは前提にあるというのであれば、今後、それをどうフィードバックし、どう対応し、どううまく使っていくかというのは、とても大切な仕事だし、問題ですが、お願いをしていきたいと思っています。後は、先生の健康もよろしくお願いします。

あとは、この先、進めていく中で折に触れてお知らせいただければと思いますので、こちらはそうしたことで進めていただければと思います。

じゃ、その2つ目は以上とさせていただきたいと思います。

それでは3点目、西宮市立高等学校スクール・ミッションについてでございます。

教育委員会より説明をお願いいたします。

○事務局　西宮市立高等学校スクール・ミッションについて、説明をさせていただきます。

資料の内容に入る前に、まず、スクール・ミッションについて、説明をさせていただきます。

昨年度、中央教育審議会のほうから、高等学校の設置者が生徒の状況や意向・期待、各学校の歴史や伝統、現在の社会や地域の状況を踏まえて、20年後、30年後の社会像・地域像を見据えて、各高等学校の存在意義、期待される社会的役割、目指すべき高等学校像をスクール・ミッションとして、再定義すべきであるということを示しました。また同時に、全ての高校において、各高等学校の入り口から出口までの教育活動の指針として、スクール・ポリシーを策定・公表すべきであるということが示されました。

今回、その方向性に沿いまして、西宮市のほうでも、市立高校のスクール・ミッションについて、策定を進めてまいりましたので、御報告をさせていただきます。

では、内容に入らせていただきます。1ページでございます。

まず、1ページでは、スクール・ミッション策定に当たって、検討した内容について、それから、またスクール・ミッションの再定義が求められていることについて、整理をしております。

まず、基本理念「夢はぐくむ教育のまち西宮」では、西宮市が、文教住宅都市宣言や、環境学習都市宣言を行って、文教諸施設の整備拡充や安全安心で暮らすことのできる地域社会を進めて、環境学習を軸とした21世紀の持続可能なまちづくりを進めていることや、西宮市の教育の基本理念として、夢を失わない限り、道は必ず開かれるという考え方のもと、「夢はぐくむ教育のまち西宮」を教育の柱に掲げたことについて、述べております。

次に、これからの教育に求められていることでは、急速な社会の変化、未来が複雑

で予測困難な状況になる中、持続可能な開発目標SDGsなどを踏まえて、地域や地球規模の課題を子供たち一人一人が自らの課題と捉え、持続可能な社会づくりにつなげていく力を育成することが、教育に求められていること。

また、これからの高等学校教育は、多様な主体との連携・協働体制を構築するとともに、他の高等学校や高等教育機関等の関係機関との連携・協働を図ることによって、20年後、30年後の社会像を見据えた、特色・魅力のある教育を行うことが求められているということを述べております。

そして最後に、最初に申しあげました西宮市立高等学校スクール・ミッション、これを再定義するということが、今、求められているということについて述べております。

そして、次の2ページのところですが、次のページですが、こちらに、西宮市立高等学校スクール・ミッションとしてを示しております。

このスクール・ミッションは大きく中教審の示している高校の存在意義、期待される社会的役割、目指すべき高等学校像の3つの視点で高校教育における課題を踏まえ、西宮市教育大綱、西宮教育推進の方向、教育長のお考えを軸にまとめております。

ここからは、内容を読み上げさせていただきます。

まず、高校の存在意義を現代的な諸課題に対応するために必要な資質・能力の育成といたしました。豊かな自然と伝統に恵まれた文教住宅都市・西宮では「夢はぐくむ教育のまち西宮」の理念の下、今を生き、未来の主演となる生徒が、確かな学力、豊かな心、健やかなる体からなる「生きる力」を育み、それぞれの夢の実現を目指している。その過程において、自分の良さや可能性を認識し、様々な社会の激しい変化を前向きに受け止め、多様な人々と協働しながら、持続可能な社会を創りあげていく資質・能力が必要となる。

西宮市立高等学校では、自らの興味・関心に基づいた探究活動や地域・大学と連携し実践される特色ある教育活動、生徒会や部活動等の自治的活動を通して、仲間たち

と考えを深め解決策を導き出そうとするなど、困難へもたくましく挑戦し続ける教育活動により、現代的な諸課題に対応するために必要な資質・能力の育成に向けた学びを実現するとしています。

次に、期待される社会的役割を地域や社会の発展への寄与といたしました。

高等学校教育においては、生徒が自己理解を深め、自己の生き方と地域・社会との関わりについて深く考えることを通じて、キャリア発達を促すことが求められている。そのためには、人間らしく豊かな人生を切り拓いていくために必要な力を身につけ、社会の形成者として必要な資質・能力が育まれるように、生徒の学びを構成していく必要がある。

西宮市立高等学校では、地域・大学と連携した活動、自然や伝統文化に親しむ活動、海外の多様な文化的背景を理解する活動や地域貢献活動に取り組むことにより、社会の中で自立する力の育成を目指す。

また、高等学校教育全般を通じて、主権者教育やキャリア教育を進め、生徒に自らの役割の価値や地域・社会との関係性を見い出させ、個々の能力や適性、興味・関心等に応じた学びを実現することで、将来のキャリアを展望する基盤の形成を促し、地域や社会の発展に寄与するとしました。

最後に、目指すべき高等学校像として、社会で活躍するリーダー及びイノベーターとしての素養を身につけた人材の育成といたしました。

複雑かつ予測困難となる社会では、自分とは異なる多様な文化や歴史、価値観を持つ人々と共存・協力し、持続可能な発展を遂げていかなければならない。そのような中で、変化に柔軟に対応しながら、自他の幸福を追求し、新たな社会を創造し先導する力及び生涯にわたって学び続け、その学びを人生に生かしつつ、地域・社会に貢献しようとする力の育成が求められている。

西宮市立高等学校では、専門学科、普通科及び普通科コース・類型の各々において、地域・社会に関わる課題を見出し、主体的に考え、多様な他者と協働して解決しよう

とする学びに取り組んでいる。そのような学びを通して、国内外の社会問題の発見・解決に向けて対応を考えるとともに、グローバルに活躍するリーダーとしての素養や、サイエンスやテクノロジーの分野等において飛躍知を発見するイノベーターとしての素養を身につけた人材の育成を目指しております。

最後、3ページ目、4ページ目は、西宮高校、それから、西宮東高等学校2校の教育目標及び沿革について、紹介をしております。

説明は以上です。よろしくお願いいたします。

○石井市長　はい、このスクール・ミッションというのを私、ちょっとこういうことを策定せないかんというのも、正直、存じ上げなかったんですが、そして、こういうタイミングでこれをつくって、スクール・ポリシーというのを各校がつくっていくというようなことであるんですが、私、これをぱっと初めて聞いたときに、これなかなか難しいことを言うなど、つまり、高校というのは大体多くが県立でございまして、我が市は2校、市立高校を抱えている。そういう中では、特に市民の、一方で現実問題として、生徒が必ずしも全部市民ばかりではないというようなところでもある中で、西宮市として、今、この令和の時代に、市立高校はどう市に位置づけられるかというのは、とても大きなことだなと、その中で、特にこの大きな原案の2項目め、地域や社会の発展への寄与というようなことで、学校で西宮学というのがあったり、西宮の地域といろいろ絡みもしていただいているというようなことでありますが、そのようなことが、今回、こうした中で一定程度位置づけられるというようなことも必須であるし、そこで盛り込まれているので、今、ここでそれなりに是かなと思ってきたわけではありますが、最初に私の意見を言ってしまいましたですけれども、こうした中で、このスクール・ミッションのこの原案、感想、御意見、御質問等、まず、教育委員の皆さんから、順次お話しいただければと思います。

長岡さん。

○長岡教育委員　難しいんですけれども、スクール・ポリシーは、公表されるもの

ということですので、オープンスクールなんか、オープンスクールって言うんですかね。そのようなときにでも、恐らくこういうものがぼっと出てくると思うんですよね。なので、他の市からも来ていただけるように、魅力のあるスクール・ミッションがつかれるといいなというふうに思うのが1つと、それから、スクール・ミッションの原案の中でも、市長が言われた、期待される社会的役割というところは、ちょっと話がずれるかもしれないんですけど、私立の学校だと立学の精神とか建学の精神に基づいて、すごく色が出しやすいと思うんですが、公共力ってどうやってつくっていくのかなと私自身思っているところですが、ここの地域や社会の発展に寄与というようなところで、しっかりと西宮市らしさがうたっていけるのではないかなというふうに思うので、そういうところを熱くというか、特徴的に表すといいのではないかなというふうに思います。

以上です。

○石井市長　ありがとうございます。

じゃ、側垣さん。

○側垣教育委員　今、私もずっと読ませていただいて、口を挟む余地はないかなと思ったりしているんですけども、まさにそのとおりだなというふうに思うんですけども、ちょっと視点を変えて、高校というか高校生時代というか、子供自身が人生の成長の中で、16歳から18歳までの人間が、その発達段階において、どういう生活をするのかとか、それから、どういう社会性を持ってとか、あるいは、もっと細かく言えば脳の発達、その子の脳の発達であるとか、そういうふうな視点を持って、これはこれとして、やはり高校生の育ち、育ちという中で、それをどう支えていくのかということについての視点も大切なのかな。これは、あくまでも表の文章なんですけれども、やはり具体的にしていくためには、そういう視点を持って、今の子供たちの発達段階に応じた高校生像というのを考えていかなきゃいけないんじゃないのかな。多分、私も西宮市立の高校の出身ですから、50年以上前の高校生なんですけれども、

そのときに求められた高校生像の点と今の社会の高校生像というのは少し変わってきているかな。まさに、私が高校生であった時代は、学生運動が盛んな頃でしたから、やはり社会的な高校生の存在価値というのは今と大分違うような見方であったのですが、今の社会の中で高校生という年齢層が、何を求められているのかということについて、教育する立場から言うと、しっかりと考え方を持ってサポートしていかなくちゃいけないのかなという。雑感ですけど、そういうふうに思いました。

○石井市長　　はい、ありがとうございます。

藤原さんどうぞ、お願いします。

○藤原教育委員　　このスクール・ミッションといい、教育大綱もそうなんですけれども、今の文科省は理念的な話が好きなんだなと思う次第であります。

拝読しまして、先ほど、側垣委員がおっしゃったように、まさに異論のない内容と申し上げます。

ただ、公立学校というのは、私学と違って色が出しにくいといえますか、とがったこと、賛否両論分かれるようなことを書きにくいという事情がきっとあるんだろうなというのを異論ないと思いながら、読む裏で感じた次第でございます。

ただ、兵庫県下においては、高校受験という場面においては、公立学校と私立学校では明らかに公立のほうが皆さん人気があって、優位があると、人気があるので、当然レベルも上がるという状況にあらうかと思えます。

ただ、世の中の流れが高校教育の無償化というところに流れていくと、経済的負担という意味では公立と私学は、今後フラットな関係になっていくとなると、その公立高校の優位性というのも今後どうなっていくか分からないというふうな時代も、もしかしたら来るのかなというふうに感じております。そうなる、もっと尖ったこと、賛否両論あるようなこともスクール・ミッションに出すことが求められる時代が来るのかなというふうに感じた次第であります。

なので、現況としては、この内容で異論ございません。

○石井市長 はい、ありがとうございます。

なかなか、ちょっと難しい話。ちなみに、県立西宮高校とか、甲山高校とか、北高校とか南高校とかありますけど、今津とか、そういうもののポリシーのよすがになる県のこの辺りのスクール・ミッションで、どんなようなものが出てくるんですか。

○事務局 まだ、県のほうからは出てきておりません。確認しますと、県のほうも今、今年度、兵庫県の高校、兵庫県立の高等学校のスクール・ミッションのほうの作成に着手しているというふうに聞いております。

○石井市長 それは、だけどさ、淡路の高校も揖保郡の高校も豊岡の高校も今津の高校も含めて、兵庫県は五国のミッションなんでしょうか。

○重松教育長 ミッションは大きな案で、それを具体的に学校の中でポリシーに落としますんで、ですから、工業高校、商業だとかは、中身がはっきりしてます。しかし、一番問題なのは、その中央審議会では普通高校って、ただ大学に行くための単なる通用門になっていないか、おかしいのではないのでしょうかということを行っています。特に、うちの市西、市東はほとんど全員が大学に行ってますんで、そういう意味では、もっと特色化っていうか、何を目指しているのか、どういう人材を育てようとしているのかをはっきり出してくださいというのが主な目的です。県立の場合は、これ大きなことを出してても地域が広いので、多分、それぞれ学校のポリシーは変わってくると思います。地域に応じて、例えば、姫路のほうだったらこういうふうなことだ、ぐらいい出てくると思いますし、それからさっき言った、工業・商業ははっきりしてますんでね、高専校生とかも。そういう意味では、普通高校が一番難しいんでしょう。多分、大きく表現するとしたら、理科系か文化系か、理科系でもどういうところを目指すのか。文化系でもこういうふうなところを目指すのかというのは、若干、出てくるのかなと思います。ですから、市西と市東でも、やはりちょっと理科系と文化系的な要素はあるし、グローバル系は出てきていますので、どこを中心に目指すのかということは、はっきりそれぞれの学校のポリシーに出てくるかなというふうに私

は思っています。

○石井市長　　ありがとうございました。

じゃ、せっかくですから最後どうですか。こちら側からすると、やっぱり市立高校が2つあるということですけども、よすがとなるこのミッションということでありますから、当局側から話をそれぞれ。

○北田副市長　　感想になりますが、皆さんおっしゃっているとおり、2校を束ねた形の西宮市立高校のスクール・ミッションなるものには、いわゆる双眼的になりがちなどころもある中で、西宮の沿革とかを書きいただいているところもある。特に、これに対して、注文つけるところはほとんどないと思うんですね。逆に言うと、これをブレイクダウンして、それぞれの学校のスクール・ポリシーをつくっていただくときに、現実問題としてまさに学区制というのは、非常に兵庫県下では大きな影響を与えているんだと思うんですね。特に、阪神間の学区の中で、西宮の学校がどういう、これ言い方が悪いかもしれませんが、優位性を占められるかどうかというところだと思えますよね。その中での西宮市内のさらに市立学校が、どこまで頑張っていけるかというところは、各学校の特色をどこで出せるかと、それが、特に高校生の心にどう響くかというところが大きな問題になってくると思えますので、いわば、この網羅的なスクール・ミッションのところは、こういう大きな理念を言っていた上で、どれだけ個々の学校の特色をこれからさらに、とがったとまでは言いませんけれども、魅力のある特色の出し方ができるかというところにかかってくると思えますので、そこは、今後の課題として、ぜひ、西宮の市立高等学校が、ほかのところから見ても、あそこに行きたいなというような見え方ができるようなものにしていただければなど当局側からは思っています。

以上です。

○田村副市長　　内容的に、特に申し上げることはないんですけども、正直、西宮程度の規模で、市立高校を2校持っているというのはなかなかない話ですので、2校

持つてゐることの意義というのが、こういうスクール・ミッションとか、ポリシーに落としていく過程で、再確認していただけたらなとは思ひます。

○石井市長　　いいですか、太田さん。

○太田局長　　すみません、教育大綱の改定をしたところで、その内容がしっかりこの中に入り込んでいるなというのが確認できて、よかつたと思ひます。

ただやっぱり、こういうポリシーとか、教育大綱もそうなんですけれども、つくるだけではなくて、どう根づかせていくのかというところが、非常に重要だなというふうには考へています。

それと、このポリシー自体は本当にすばらしいものだと思うんですけども、その中でやっぱり、これは学校のポリシーですけれども、高校生というのは、やっぱり自分を見詰めて、これからどんなふうに進路を考へていくのかという重要な時期だと思ひますので、こういったミッションがあるよと、スクール・ミッションがあるよということをやつぱり高校生の心に響くようにしていただくと、そういった進路を考へる上でのヒントになるのかなというふうには感じました。

以上です。

○石井市長　　はい、それでは、特に後は、この件に関しては、おおむね皆さん方のこの原案ということに関しては、御理解をいただいたということでございますので、総合教育会議として西宮市立高校スクール・ミッションというのは、これを了として進めていただければと思ひます。

特に、地域と大学と関係した活動、活動や地域、地域貢献活動に取り組む、そして、社会の中で自立する力を目指すというのがございますので、現場にその辺りをより意識をしてもらった中で、スクール・ポリシーをつくっていただいて、その上で、さらなる学校から地域により出ていくような、そんなようなことを意識づけてもらうようにしてもらえればなと思ひます。

それでは、この議題もここまでとさせていただきたいと思ひます。

それでは、本日の議題について、整理・確認をさせていただきます。

まず、1点目のG I G Aスクール構想については、現状の確認をさせていただきました。まだ、離陸段階、発展途上段階という中でありますが、グットプラクティスを共有をして、そして今後の課題、それから、まだまだ確認しなきゃいけないところについてはしっかりと追い、そしてさらには、5年後、6年後を見据えてどうあるかということも意識をし始めながら、進めていっていただければと思います。

「こころん・サーモ」については、大変ポジティブな評価がある中でありますが、一方でとてもセンシティブなことでありますので、しっかり慎重に、一方で慎重に前に進んでいくようなことを確実に、そして、そうしたことで対応いただければと思います。

スクール・ミッションにつきましては、示していただいた原案を了として、これを柱として、今後、各校のポリシーにつなげ、これも前に進めていっていただければと思います。

以上でございます。本日予定した議事は終わりました。

最後に教育長から一言、御挨拶、まとめとしてお願いしたいと思います。

○重松教育長　　本日は、ある意味でこれからの教育の在り方というのを示すみたいな、G I G Aスクールだとか、「こころん・サーモ」、それから、市立高校のスクール・ミッションということで、いろいろな意見をいただきましたので、これからの西宮の教育がより充実するように、それ以上のものを活用させていただいて、いい方向に行くように努力していきたいと思いますので、本日はそういう意味で、いろんな意見をいただきましてありがとうございました。

○石井市長　　それでは、以上で、本日の総合教育会議を終了したいと思います。

お疲れさまでした。ありがとうございました。

閉会 午後3時10分